
渴く

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渴く

【Nコード】

N6030S

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

整理してたら出てきたので。

圏外の携帯電話が示す時刻は午後九時。

押し込まれた狭い部屋。隅に三つ積まれたダンボール。その隣に毛布が二枚たたまれている。窓はなく電灯が天然物でない光を吐き出す。隣にいる大企業の社長の息子で彼氏。彼は「いやぁ失敗失敗」やわらかい笑顔だ。いつもなら「やれやれ仕方ないやつね」で済ませる。しかし今回ばかりはそうはいかない。誰が誘拐事件に巻き込まれて、やれやれ、仕方のないやつだ、で済ませてやるというのか。

「出たら別れる。絶対別れる」

「つれないこと言うなよ。これも愛を深めるための試練さ」

エンジン音と尻に伝わる振動が妙に不快だ。隣の男と同じくらいに。

「ああ、もう……」

「なあに。ほんの二十時間の我慢だよ」

横っ面をぶつとばそうか考えてやめた。エネルギーを無駄遣いしなくなかった。

トラックが停止。人の降りる気配のあとで二度ノックが響いた。

「なんだい？」

彼が答える。

「俺達の目的は金だけ。反抗しなければお前らに危害は加えない」
誘拐犯らしい男の声。「ほらな」とも言いたげな彼のドヤ顔がムカついたので蹴る。

「中の物は使って構わない。といっても大したものはないはずだが。
食い物と水はダンボールの中だ。好きに食え」

「OK、わかった。ところで犯人さん。一つ質問があるんだが」
「なんだ？」

「便所はどこだい？」

沈黙が流れた。嫌な空気が場を支配する。「……嘘でしょ？」顔の筋肉が引き攣る。

「そこでしろ」

八つ当たりに彼を殴る。どことなく目を輝かせている気がするのが最高にキモい。

「死ね」

殴っている途中でエンジン音がまた低いうねりを上げた。ここからまだどこかにいくのかと思ったがどうやら車を乗り換えたらしかった。音が遠ざかる。ああ、本当に置き去りにされるんだ。演劇とかじゃないんだ。

「まっ、気楽に行こうじゃないか」

早速ダンボールを開けた彼が500ミリのペットボトルを一つ投げて寄越した。受け取らなかったので私に当たり、床を転がる。

「飲んどけ。体が持たないぜ」

彼の喉を水が滑る。彼に十分間何もなかったら口をつけようと考えてる私は慎重すぎるだろうか？「大丈夫。毒なんか入ってないぜ。第一やつらにはそんなことする理由がない」彼が言う。喉は……、渴いている。キャップを外し、無色透明な液体を三十秒ばかり眺めて、飲んだ。都会の水道水に慣れているからか、むしろ美味しかった。

嫌な感じに彼が笑う。

「さて、俺はもう寝るよ」

彼は頭まで毛布を被って私に背を向けた。五分も経たないうちに寝息が聞こえ始める。

「……私も寝るか」

彼を見ていたらなんか自分だけ気を張り詰めているのが馬鹿らしくなってきた。

目が覚めた。体が痛い。床が固いせいか。でも目覚め自体は心地

いい。時刻は六時。彼は先に起きていた。

「おはよう」

いつもの笑顔。あまりに普通のテンションだったので私はここがトラックの荷台であることを一瞬忘れてトイレを探す。積まれたダンボールと毛布に包まれた彼しかない。

「ああ、トイレか。ペットボトルかダンボールにしちゃえば？」

察したらしい彼が言う。

「俺はもうしたけど」

順応が早すぎる。私にはそこまで割り切れない。だけど生理的なものは抑え切れなくて私も空のボトルを取った。

それからもう一日経った。誘拐犯も警察もこない。「長丁場になるかもな」彼がポツリと言う。「水と食べ物、大丈夫かな」「節約はしたほうがいいだろうね」ダンボールを全部ひっくり返す。水と、味気のなさそうなパンが落ちる。二人で食べて三日か四日くらいは持つくらいに見えた。多めに用意してあったのか、もしくは誘拐犯達の分もあったのかもしれない。

「普通に分けてもおもしろくないだろ。一つゲームで決めないか？」やだ、と私は言ったが彼は無視して続けた。

「そう言わずに、なんでも楽しんでやることが人生の秘訣だろ」

誘拐を楽しめるほど私の神経は太くない。

「ルールは簡単」

財布から抜いた十円玉を見せる。

「俺が後ろ手にこれを握りこむ」

両手を私の前に差し出す。

「どちらに入っているか当てたら水もパンも君の物だ」

こうなったら彼は梃子でも動かない。溜め息を一つ。右拳を指差した。両方に入ってなかったらしばき倒してやる。彼が手を広げる。十円玉が音を立てて落ちた。

「君の物だ」

十日ですべてなくなつた。
二週間して彼が言った。

「最後のゲームをしよう」

いままでのゲームの勝敗は13勝6敗。私はバカじゃない。二分の一の確率のゲームにしては勝率が高すぎるのはわかってる。最後のゲームも私に譲ってくれるんだろうと楽観的に思っていた。もちろん私は「最後の水」を手にするつもりはなかったのだけど。

左手を指した。コインはなかった。

「え……？」

「俺の勝ちだ」

右手を開いた。そちらにもコインはない。

「嘘……、そんなはず……、じゃあどうして私に……」

「飢えて渴いてたほうが、最後のディナーが美味しいじゃないか。そもそもこの誘拐が俺が仕組んだものだとか、君は考えなかったのか？ 全部伏線だよ。この瞬間のためのね」

彼がゆっくり歩いてくる。最後も水を。私の血を飲むために。殺される。恐かった。彼の手が私の喉に伸びた。私は……。

気づいたら彼の呼吸を止めていた。

どうやら私が殺したみたいだ。

渴きだけが残る。涎を垂らす彼をみて最初に思ったのは「ああ、ここに水があるじゃない」だった。最初は彼の唇を吸った。だけど足りなくなつて首筋を歯で破った。温かい液体が私の喉を濡らした。

警察がトラックを開けたのはそれから更に一週間後。私は病院に入れられた。

誘拐犯は交通事故で死んでいたらしい。

彼は私を食べようとした。だけどいまになって私は思う。

あれは精一杯表情を作ってたんじゃないか。

だって私は例えコインが右手にあっても彼を殺そうとは思わなかった。

私が彼を殺すことができたのは、彼が私を殺そうとしたからだ。そして首を絞める私に抵抗しなかったからだ。

携帯電話にはひっきりなしに食人鬼だとかの中傷の電話が掛かってくる。

私はいま死にたい。

（後書き）

創作五枚会で投稿したコインの改稿前です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030s/>

渴く

2011年4月20日04時25分発行